

李賀詩における疾病表現について

——自他を取り持つ可變的媒介——

小田 健太

はじめに

李賀（七九〇～八一六）は、短い生涯を病に苦しんだ詩人である。李商隱の「李賀小伝」（劉学鍇・余恕誠『李商隱文編年校注』中華書局、二〇〇二、二二六五頁）に記されている、白玉楼中の人となって昇天したという李賀の伝説的な死の場面¹は広く知られており、それは、詩人としての天才的な適性を示しながらも、社会的にはしかるべき評価と待遇がえられなかった李賀の不幸な一生を暗示している。いかにも李賀にふさわしい最期だと、多くの読者が受け取ったのでもある。しかし、虚構性が濃厚な逸話を一応排して李賀の実際の死因を想定しようとする場合、「李賀小伝」の記事を鵜呑みにするわけにはいかない。とはいえ李賀が若くして死ななければならなかった直接的な理由を知りうる資料はないのが実情である。そうではあるが、李賀詩全体に自身の病が多く描かれている点に鑑みれば、やはり彼の死因は何らかの病気であったと見るのが穏当であろう²。こうした想定に立脚しながら李賀の具体的な死因（＝病名）を特定しようとする考察もないわけではないが、たとえ表現の分析を通して一定程度妥当性のある特定の病名を彼に当てはめうるのだとしても、それは伝記的事実の考証に寄与しこそすれ、作品

そのものの理解を補助するかといえ、おそらく必ずしもそうではないだろう。以上のような病理学的な関心に基づく考察を除いても、李賀と病の関連性について言及した論考は、すでに数多く存在する。そのうちの大部分は、李賀の病が彼独自の作風の形成にどのように寄与したか、という点に関心が向けられている。それによつて例えば、李賀の詩に顕著な幻想性は病者特有の異常な思考に由来する、といった説明が繰り返しなされている。つまり、李賀が病者であつたという事実を念頭に置きながら作品を眺めることで、李賀詩全体に伏在する特異な作風に根拠を与えようとしているのである。そうした諸論考にとつて、李賀詩中の病の表現は、李賀が終生病に侵されていた事実を提供する史料であつて、それ以上の価値は見出されていないように思われる。一步踏み込んで病を詠じた表現そのものを主たる考察対象とする先行研究は、意外なようではあるがそれほど多くないのが実際のところである。そこで本論では、病に関連する表現を重点的に取り上げて、李賀はどのように病と対峙し、それを表現したか、といった点について明らかにすることを目的とする。

あらかじめ述べておくならば、李賀の詩には、病を主題とする狭義の詠病詩¹は皆無である。李賀の作品においては、ほぼ例外なく詩中の素材の一つとして病が取り上げられているのである。この事實は、李賀にとつての病が、特別に取り立てて主題として詠じるまでもない日常的な状態であつたことを暗に示している。詩題と本文とを問わず、詠病詩にはしばしば「病中」や「病後」といった語が用いられている。のに対して、李賀詩には一例も見られないことがその傍証たりうる。「病中」や「病後」の語は、それを用いた詩人が、病を一過性の異常な状態と捉えていることを示唆するからである。彼らは発病中の一時期を日常から区切り、今現在そのただ中にいるか、あるいは治癒した後であるかをあえて明言しているのである。健康な状態こそが日常であり、その日常は病によつて一時的に損なわれることがあつても永続するわけではない、といういわば一般的な健康観・疾病観が彼らの基本

的な認識となつてゐるのである。それに対して李賀にとって病は、健康な時期と比べて相対的に把握された異常な状態ではなかつたといえよう。いふなれば、健康という肯定的価値を喪失した形で、李賀は病と対峙してゐたのである。慢性的な病によつて誘引されたそのような心理的状況こそが、真に病的状態であつたとも見なせるのではないだろうか。

動物を除けば、他者の病を詠じた表現が見当たらないのも、李賀の詩に顕著な傾向として指摘できる。つまり李賀の詩に詠じられる病者は、李賀自身を表現対象としてゐるのである。病を患つた他者を慰勞する作品が唐詩に数多く認められるにも関わらず、李賀詩に類例が見当たらないのは、周囲に見舞うべき病者が少なかつたという外的要因もあつたのかもしれないが、それよりも、李賀が自身の病と向き合うことにこそ創作のエネルギーを傾けるをえなかつたという内的必然性を想定すべきだろう。

いわゆる「鬼詩」と呼ばれる冥界を舞台とする作品も含め、およそ現実世界とはかけ離れた幻想的な詩を李賀が数多く残しているのは、すでに周知の事実である。そうした作品群に李賀の本領が表れてゐると考えてもいい。一方、本論で取り上げる病を詠じた李賀の諸作品は、そのほとんどすべてが現実を舞台とするものである。これは一見当然のようではあるが、李賀の空想世界に病が存在していないという点については、改めて確認されてよい。李賀にとつての病は、常に現実原則との連関の中で捉えられていたのである。従つて、病を詠じた詩の分析は、李賀が現実世界とどのように対峙してゐたかを探ることと、ほぼ等しい。そして、空想世界と現実世界を分かち顯著な相違の一つは、具体的他者との接点の有無である。現に李賀の詩における病は、特定の他者への発話としての機能を持つ作品に詠じられた例が少なくない。本論において自他の関係性の在り様に寄与する可變的媒介としての病に着目するゆえんである。

一 知友に送った詩における病の表象

(一)「出城、寄権璩・楊敬之」について

はじめに取り上げるのは、元和七年(八一二)春に詠じられた、「出城、寄権璩・楊敬之」(『箋注』四五一頁、全四句)である。時に二十三歳であった李賀は、奉礼郎の職に就いていたものの、鬱々として楽しまない日々が続いていた。さらにその微官すら病を原因とする帰郷によって打ち棄てなければならなかった。

草暖雲昏万里春 草は暖かに雲は昏し 万里の春

宮花払面送行人 宮花 面を払って行人を送る

自言漢劍当飛去 自ら言う 漢劍 当に飛び去るべきに

何事還車載病身 何事ぞ 還車 病身を載すると

この詩について、明・曾益の注に次のように見えている。

賀平昔自負、故後二句設言以解之曰、漢劍神物、固当飛去、今何事而還車乎。病故也。猶言非己之故、時命不齊之故也(賀は平昔 自負す、故に後の二句は言を設けて以て之を解いて曰く、漢劍は神物にして、固より当に飛び去るべきに、今何事にして車に還るやと。病の故なり。猶己の故に非ずして、時命^{ひと}齊しからざるの故なるを言うがごときなり)。

以上の指摘のとおり、第三句の「漢劍」には李賀の自負心が表れている。この語は『箋注』が『異苑』卷二の記述を引用しているように、晋・恵帝の元康五年(二九五)、武器庫が焼けたときに漢・高祖のかつての所持品であ

った白蛇劍が飛び去っていったという怪事に基づく。それは高く舞い上がっていく「神物」であるはずなのに、体を車に横たえて帰郷の途に就かなければならないとは一体どうしたことかと李賀は疑問を呈している。「漢劍」たる自負心によって引き出された「何事」という疑問詞は、訴えるべき相手のいない訴えを、やはり何者かに向かつて訴えざるをえない痛烈な心情の反映として、詩題にいうところの権璩や楊敬之に向けられていると読み取れる。¹⁰ 曾益の理解に従うならば、李賀は、帰郷を余儀なくされた本質的な理由は自分自身にあるのではなく、何らかの不可抗力によって時宜に適わない状況が現出したためだと考えていたことになる。李賀の懸案は病による肉体的苦痛にあつたのではない。少なくとも、「出城、寄権璩・楊敬之」においては具体的な病の描写は捨象されている。どうにもならない不可解な現実の状況に対する怒りと戸惑いのない交ぜになったような割り切れない感情が、それによってかえって先鋭に表面化しているといえる。

なお、『全唐詩』において、「漢劍」の語は李賀以外に盧照隣の用例を見るのみである。「明月引」（李雲逸『盧照隣集校注』中華書局、一九九八、八四頁、全一八句）に、

13 文姫絶域

文姫は絶域

14 侍子他郷

侍子は他郷

15 見胡鞍之似練

胡鞍の練に似たるを見

16 知漢劍之如霜

漢劍の霜の如きを知る

と詠じられている。『盧照隣集校注』によれば、第十三句と第十五句、第十四句と第十六句がそれぞれ隔句対をなしており、第十六句は、「侍子」、つまり他国に人質として仕えている者が胸中に抱いている、自分の安全は保障されておらずいつ殺されてしまうかわからないという危機感に満ちた心境を写し取っているという。ここでの「漢

劍」は語り手の自負を示すものではない。李賀のように自己の才能、それも病によって帰郷を余儀なくされ、十全に發揮すべき機会を喪失した才能の象徴として用いられた例は見られないのである^{三〇}。類型に収まらない措辞の裏側に、李賀の野心的な自己把握が感じられる。

さて、「出城、寄權璩・楊敬之」は、病の描写が前半の春景と対置されている。生気溢れる暖かな春の季節と、病身を車に横たえて帰郷する詩人の対照が鮮明である。満開の春は、打ちひしがれた李賀の不満や不平を否が応に動かしたたてである。李賀の詩と同じように春を背景として「病身」の語を用いている詩として、張籍の「病中酬元宗簡」（徐礼節・余恕誠『張籍集繫年校注』中華書局、二〇一一、七七七頁、全四句）が挙げられる。

東風漸暖滿城春 東風 漸く暖かなり 滿城の春

獨向深房養病身 獨り深房に向いて病身を養う

莫說櫻桃花已發 説う莫かれ 櫻桃 花已に發くも

今年不作看花人 今年は花を見る人に作らずと

この詩に描かれている春は、病身を養うのに適した温暖な季節という側面が強調されている。病は厭うべきものではあるが、張籍は苛立ちを沈めて療養に励もうとしているのである^{三一}。それは季節に自身の病体を寄り添わせ、暮らそうとする態度の表明でもある。李賀があたかも春の華やかさに拮抗するかのようには、「何事ぞ」と詮無い問いを發したのとは異なるのである。張籍の作品の転・結句には、詩を贈った相手である元宗簡とともに櫻桃を鑑賞できない悔しさが垣間見えるものの、この詩を送られた元宗簡は、病に向き合う張籍のひたむきな態度を読み取って、かえって胸をなでおろしたのではないだろうか。それに対して李賀から詩を示された權璩と楊敬之は何を思ったか。「漢劍」たる自負を持ちながら、病身を引きずって帰郷しなければならない李賀の境遇に同情するとして

も、それは純粹な真情から発したものと断言できなかったかもしれない。李賀の本意がどうであれ、当てこすられたような、釈然としない気分を彼らが全く感じなかったとはいいい切れない。少なくとも、「自言」の語が象徴的に示しているように、「出城、寄権璩・楊敬之」が内向的な作品となっているのは間違いない。

結局のところ、李賀の「出城、寄権璩・楊敬之」は、やや自己完結的な、それでいて病に対する心理的な解決の糸口を見つけられずに声高に叫ぶことしかできない、憤慨と困惑のない交ぜになった悲痛な詩であると見なせよう。同じく「病身」の語を用いた唐詩として、羅袞の七律「清明赤水寺居」(『全唐詩』卷七三四)の頷聯に、「浮生浮世只多事、野水野花娛病身(浮生 浮世 只多事なり、野水 野花 病身を娛しむ)」と詠じられているような精神的な余裕や超然とした態度は見受けられない。

季節と病の関連性についてさらに付け加えておくならば、「出城、寄権璩・楊敬之」の第一・二句は春の形象としては美的に詠じられているが、かえってそれだけに一篇全体に位置づける場合には、どこかよそよそしく、語り手を疎外するかのよう¹⁰に受け取れよう。春は四時の規則的な運行に則って、温暖な気候や生気に溢れる植物を現前させる。李賀は「万里」の向こうまで無限に広がるかのような華々しい風物の中に置かれていることを自認している。第一句などは春の形象としては大づかみな描写であるが、それだけに普遍的な光景でもある¹¹。「出城、寄権璩・楊敬之」には、生気漲る春の季節の躍動感と、それとは対照的な手の打ちようのない李賀の境遇が対比的に語られており、そのコントラストによって、彼の苛立ちや悲哀が浮き彫りになっているのである。大いなる自然の循環と、あるべき理想の自己の両方から疎外される卑小な存在としてしかありえないことの悲哀を、李賀は病を契機として感得しているといえよう¹²。

一方、特定の個人に宛てた作品ではないが、李賀には「出城、寄権璩・楊敬之」と同じく春を背景としながら、

小康状態にある病を詠じた詩も見受けられる。「南園十三首」(其九)(『箋注』五一九頁、全四句)である。「南園十三首」は、『箋注』が、「……這組詩当写於元和八年春夏間」と述べているように、元和八年(八一三)の春から夏にかけて詠じられた連作である。(其八)には、「春水初生乳燕飛(春水初めて生じて乳燕飛ぶ)」とあるし、(其十)には、「無心裁曲臥春風(曲を裁するに心無くして春風に臥す)」と詠じられているため、二首の間に挟まれている(其九)も春景を描写していると考えられる。

泉沙奕臥鴛鴦暖 泉沙 奕やわらかに臥して鴛鴦暖かに

曲岸回篙舴艋遲 曲岸 篙を回らして舴艋さくぽう遅し

瀉酒木蘭椒葉蓋 酒を瀉ぐ 木蘭 椒葉の蓋

病容扶起種菱糸 病容 扶起して菱糸を種うう

曾益の注によつて大意を把握しておきたい。

泉沙転則鴛鴦動、岸曲則舟行遅。木蘭堪以貯酒、椒葉蓋受辛香也。病容初起、載酒種菱、亦一樂事。猶前云課種瓜也(泉沙転ずれば則ち鴛鴦動き、岸曲がれば則ち舟行遅し。木蘭堪えて以て酒を貯え、椒葉の蓋は辛香を受くるなり。病容初めて起こされて、酒を載せ菱を種うるは、亦た一の樂事なり。猶前に課して瓜を種えしむと云うがごときなり)。

鴛鴦はいかにもののびのびとしており、屈曲した水流を行く舟はゆったりとした速度で進んでいく。周囲の事物がすでにそうであるように、李賀の内面にも「出城、寄権璩・楊敬之」に見られたような波立ちはない。第三句に詠じられている酒の香りが積極的な気分を誘ったのもあろうか、病体を起こしてもらつて、菱の植え付けを手伝ったという¹⁶⁰。すなわちそれが曾益のいう「樂事」である。「課して瓜を種えしむ」というのは「南園十三首」(其

三）『箋注』五〇八頁）に、「自課越傭能種瓜（自ら越傭に課して能く瓜を種えしむ）」とあるのを指す。雇い人の助力をえて、瓜を植えることができるという。心を楽しませるような温暖な佳景に囲まれながらも、病を患った自己を認識せざるをえないのは、いかなる状況にあつても病が常に意識の片隅に位置していたことの証左となろう。春の華やぎは病者に積極的な行為を促すものでもある。「南園十三首」（其九）と類似した主題の作品として、劉言史の「扶病春亭」（『全唐詩』卷四六八、全四句）が挙げられる。

強梳稀髮著綸巾　強いて稀髮を梳くしつて綸巾を著け

捨杖空行試病身　杖を捨てて空しく行つて病身を試さんとす

花間自欲裴回立　花間　自ら裴回せんと欲して立つも

稚子牽衣不許人　稚子は衣を牽いて人を許さず

身支度を整えて花咲く道を散策しようと試みる劉言史であるが、病状を心配してであろう、幼い子供に引き留められたと詠じている。自分の思うように外出もできない不自由な現状に対する無力感が劉言史の胸中になかったとはいえない。しかしこの詩においては自身の情けなさがユーモアに包んで詠じられており、それによつて悲哀を抑制した詩的感興を漂わせているように読める。「南園十三首」（其九）と「扶病春亭」の両首は、病める自己に時として訪れる日常生活のささやかな精神の弛緩を掬い取つて詠じている点で共通しているといえる。

（二）「仁和里雜叙皇甫湜、湜新尉陸渾」について

続いて取り上げる「仁和里雜叙皇甫湜、湜新尉陸渾」（『箋注』九一頁、全二〇句）は、詩題にあるとおり、洛陽

の仁和里において皇甫湜に向けて詠じられたものである。李賀詩の中では数少ない、具体的な病状に筆が割かれた作品となっている。末尾の八句を引こう。

13 那知堅都相草草 　　那んぞ知らん 堅都の相い草草たるを

14 客枕幽单看春老 　　客枕 幽单 春の老ゆるを看る

15 归来骨薄面無膏 　　帰り来たれば骨薄く面に膏無し

16 疫氣衝頭鬢茎少 　　疫氣 頭を衝いて鬢茎少し

17 欲雕小説干天官 　　小説を雕して天官を干めんと欲するも

18 宗孫不調為誰憐 　　宗孫 調せられずして誰の憐れむところと為らん

19 明朝下元復西道 　　明朝 下元 復た西道

20 崆峒叙別長如天 　　崆峒 別れを叙して長く天の如くならん

病状が詠じられている第十五・十六句、及びその前後について曾益の注によつて大意を示そう。

客枕幽单、失意高臥。看春老、聊度日。骨薄無膏、染疫。染疫故髮脱。雖小説干天官欲言事。宗孫謂己。不調久居下為誰憐（客枕幽单は、失意して高臥するなり。春の老ゆるを看るとは、聊か日を度るなり。骨薄く膏無しとは、疫に染まるなり。疫に染まりて故に髮脱す。小説と雖も天官を干めて事を言わんと欲す。宗孫は己を謂う。調せられざること久しくして下に居るも誰の憐れむところと為らん）。

失意のままに日々をやり過ごしつつ、宗室に連なる自負を抱く李賀は、執筆によつて官職を求めているがその希望はかなえられず、しかも誰一人として憐れんでくれる人もいない、という。また、第十六句について曾益は別途次のような説明も加えている。

疫天行四時疫氣。病後則毛髮俱脫（疫とは天行四時の疫氣。病後は則ち毛髮俱に脱す）。

他にも例えば陳弘治『李長吉歌詩校釈』（嘉新水泥公司文化基金会、一九六九）に、「自叙消瘦之狀。言自西都失意歸來、顔色枯槁、鬢毛凋落也」（一四〇頁）と述べられているように、李賀は疫病によつて髪が抜け落ちてしまったのである。

ここで強調しておくべきは、具体的な病状を詠じた第十五・十六句に類似した表現が、他の唐詩に見当たらない点である。

「骨薄」は、李賀を除けば、陳子昂の「感遇詩三十八首」（其四）（『全唐詩』卷八三）に、「骨肉且相薄、他人安得忠（骨肉すら且つ相い薄きに、他人 安んぞ忠を得んや）」とあるのが目につくのみである。この場合の「骨肉」は肉親のことであろうから、李賀の句とは内容が異なる。「面無膏」についても適当な類例が見出せない。少なくとも唐詩において、「膏」字を顔面の油分として用いた例はないようである。特定の典拠を用いるのではなく、実際に顕現している病状を観察によつて忠実に描こうとしているだけに、迫真的な描写となっている。第十六句に至つては、「疫氣」や「衝頭」、「鬢茎」といった一句を構成するほとんどすべての語彙が、李賀以外の唐詩に見当たらない。詩語としては見慣れない語をあえて作品に取り込みながら自己の病状をリアリティ豊かに描き出している点に、この詩の特色を認めるべきである。

実は「疫」の一字に限って見ても、『全唐詩』中の用例は十に満たない。また、李賀は同字を二例用いているが、複数用いているのは李賀のみである。唐詩の一例として、戴叔倫「女耕田行」（蔣寅『戴叔倫詩集校注』上海古籍出版社、二〇一〇、一七二頁、全一八句）の第七・八句には次のように詠じられている。

去年災疫牛囤空 去年の災疫 牛囤空しく

截絹買刀都市中 絹を截り刀を買う 都市の中

牛についての記述であるが、ここでの「疫」は、集団的な死を招いて牛舎が空になりかねないほどの強烈な感染力を持つ疫病を指していると理解される。第八句について『戴叔倫詩集校注』が、「暗示家貧無錢」と述べていることから推し量るに、第七句に詠じられているような疫病による家畜の消失は、人々に経済的な致命傷を与えかねない災厄であつただろう。

人間が罹る病としての「疫」については、例えば杜甫の「迴棹」（『杜詩詳註』卷二三、全二八句）に「衡岳江湖大、蒸池疫癘偏（衡岳 江湖大にして、蒸池 疫癘偏なり）」と詠じられているように、南方の地理的特徴の一つとして語られる場合が複数認められる。他にも韓愈の「赴江陵途中、寄贈王二十補闕・李十一拾遺・李二十六員外、翰林三学士」（錢仲聯『韓昌黎詩繫年集釈』上海古籍出版社、一九八四、二八八頁）に、「癘疫忽潜遘、十家無一瘳（癘疫忽ち潜かに遘い、十家に一の瘳ゆるも無し）」とあるのは、韓愈が陽山令として左遷された先における疫病の猛威について述べているのである。いずれの用例も客観的な立場から「疫」を詠じており、李賀「仁和里雜叙皇甫湜、湜新尉陸渾」のように自身の罹患するものとしては表現されていない。

その一方、李賀の「昌谷詩」（『箋注』四七四頁、全九八句）には、杜甫や韓愈と同様に、客観的な視点から見た「疫」が詠じられている。「昌谷詩」は、詩題にあるとおり彼の故郷である昌谷（河南省福昌県）の風俗をさまざまな角度から詠じた長篇であり、その第五十九・六十句に、「隣凶不相杵、疫病無邪祀（隣凶なれば相杵せず、疫病に邪祀無し）」と見えている。第六十句は、疫病が蔓延してもでたらめな神に祈るようなまねはしない、それだけまっとうな風俗が地域に浸透している、ということ述べているのである。

改めて「仁和里雜叙皇甫湜、湜新尉陸渾」についてまとめておくと、具体的な病状を述べた第十五・十六句

には、前代の詩に用いられていなかった語彙が散見される。典拠性のある語彙の使用によって類型的な病の描写に陥るのを、李賀はあえて避けているといえる。今まさに自分の身に顕現している病状をつぶさに見つめ、それを皇甫湜にうったえかけようとする態度が、結果的に目新しい句を生み出す要因になったと考えられよう。

第十四句に詠じられているように、春景は盛りを過ぎて衰退していく。衰退する春景の描写を承ける形で次聯では、顔面に油気がなく、病によって鬢毛も抜け落ちていくといったように、具体的な病態が詠じられる。季節の推移は自己の衰退の端的な象徴となつていると考えられる。さらに李賀に追い打ちをかけるのは、自己の身体的な状態もさることながら、自己の境遇までまったく思うようにならないことである。文才を生かして官職を求めるものの、取り上げられる兆しはなく、憐れんでくれる者もない。李賀の口吻は愚痴っぽく、この詩を贈った相手である皇甫湜に憐れみを求めているようでもある。訴えても仕方のない窮状を相手に訴えざるをえないほどに、病や不遇感、李賀の精神に蔓延つていたのであろう。病と社会的不遇が結びつく類似した表現は、「聴穎師彈琴歌」〔箋注〕三三七頁、全一六句〕にも認められる。穎師の弾く琴の形状や音色のうつくしさを描写した上で、末尾の四句に、「涼館聞絃驚病客、葉囊暫別竜鬚席。請歌直請卿相歌、奉礼官卑復何益（涼館　絃を聞いて病客驚く、葉囊暫く別る　竜鬚の席。歌を請わば直ちに卿相の歌を請え、奉礼は官卑くして復た何の益かあらん）」と詠じられるのがそれに該当する。引用した前半の二句は、清・王琦が、「病中聞穎師琴声高妙、不覺為之坐起、有霍然病已之意（病中　穎師の琴声の高妙なるを聞いて、覺えず之の為に坐起し、霍然として病已むの意有り）」と注を付しているように、病を忘れて飛び起きるほどに穎師の奏する琴の音は素晴らしくと述べている。しかしそうしたすぐれた演奏を耳にしても、その感動は結局のところ自身が拝命していた官職（奉礼郎）への不満にすり替えられてしまふのである。

二 弟や使用人に送った詩における病の表象

本節では、「示弟」(『箋注』四七一頁)と「昌谷讀書示巴童」(『箋注』六八頁)を例に取りながら、近親者である弟や、日常的に接する機会が多いであろう使用人を作品享受の対象とする詩において、李賀の病がどのように描かれているかを考察する。

(一)「示弟」について

まずは「示弟」(『箋注』四七一頁、全八句)から見ていきたい。全篇を掲出すると次のようになる。

- 1 別弟三年後 弟に別れて三年の後
- 2 還家一日餘 家に還って一日餘り
- 3 醪醕今夕酒 醪醕 今夕の酒
- 4 緗帙去時書 緗帙 去時の書
- 5 病骨猶能在 病骨 猶能く在り
- 6 人間底事無 人間 底事なにごとか無からん
- 7 何須問牛馬 何ぞ須いん 牛馬を問うを
- 8 拋擲任鼻盧 拋擲して鼻盧に任さん

元和七年(八一二)、奉礼郎の職を辞して昌谷に帰郷し、三年ぶりに弟に再会した際の作である。第五句以下に

ついで、曾益は次のように注を付している。

五以得見為幸、六言時命不常耳。七・八言以己為牛即牛、馬即馬^ど。一聽自然、無所置力、如博者之任梟盧而已（五は以て見ゆるを得て幸いと為し、六は時命の常ならざるを言うのみ。七・八は己を以て牛なれば即ち牛、馬なれば即ち馬と為らんことを言う。一えに自然に聴き、力を置く所無きこと、博者の梟盧に任すが如きのみ）。

第五句は弟に再会できた幸運を、第六句は命運には不安定な要素が付き物であるという普遍的な真理をそれぞれ詠じている。病は治癒していないものの小康状態を維持しており、だからこそ弟と再会できた、その僥倖を詠じていると判断しているのである。第七・八句については、あたかも博者が出目に任せるように、力むことなく行く末を自然のなりゆきに委ねる態度を示すものと曾益は解している。

「病骨」の語が用いられている第五句について分析を加えるならば以下のようなになる。まず、病に罹っている状態を「在」字によって示した表現としては、例えば謝靈運（三八五〜四三三）の「遊南亭」（『文選』卷二二）に、「藥餌情所止、衰疾忽在斯（藥餌 情の止むる所、衰疾 忽ち斯に在り）」と詠じられている。李賀と同時代の例としては、孟郊の「戲贈無本二首」（其一）（華忱之・喻学才『孟郊詩集校注』人民文学出版社、一九九五、三〇〇頁）に、「金瘡非戰痕、峭病方在茲（金瘡 戦痕に非ず、峭病 方に茲に在り）」と見えており、これは謝靈運の句と構造が類似している。「病（疾）」と「在」の組み合わせそのものはそれほど珍しくない詠じ方であったといえる。従ってそれぞれの詩人の個性は、二字の中間に用いられている副詞的要素に顕現することとなる。李賀の詩でいえば「猶能」がそれに当たる^ぶ。「猶能」の語は、六朝期の例としては王僧孺の「春怨」（『玉台新詠』卷六、全二〇句）に次のように見えている。

- | | |
|----------|-----------|
| 7 万里断音書 | 万里 音書断え |
| 8 十載異棲宿 | 十載 棲宿を異にす |
| 9 積愁落芳鬢 | 積愁 芳鬢落ち |
| 10 長啼壊美目 | 長啼 美目壊る |
| ... | ... |

19 幾過度風霜 幾たびか過ぎて風霜を度る

20 猶能保瑩独 猶能く瑩独を保つ

遠征した夫は十年も帰ってこず、作中の主人公である妻の容貌は衰えてしまった。それでも心変わりすることなく、今も孤独に待ち続けている、という典型的な閨怨詩の筋立てによって構成されている。

末尾の句に詠じられているように、思婦が「瑩独を保つ」状態を継続することは、封建道德上の肯定的な価値を帯びている。しかし、残された妻のそうした道德的な行為は、自然といつまでも保持されるわけではない。むしろ無策でいれば道德的純粋性は外部の夾雑物にしばしば曇らされてしまうであろう。つまり、いつ途切れてもおかしくない「瑩独を保つ」という行為は、当事者の強靱な意志によって継続されているのであり、それに対する作者の驚きと純心への称讃の意味合いが「猶能」に込められていると考えられるのである。「猶能」の句が末尾に配置されている点にも着目したい。王僧孺の「春怨」以降、「猶能」の語は、唐詩においてもしばしば末尾の一句に用いられているからである。個々の用例の偏差をひとまず度外視するならば、「猶能」の語は、一篇を閉じるにふさわしい余情を結論的に示唆しうる語彙であったと考えられる。

付け加えておくならば、王僧孺「春怨」の末尾の一句は、夫の長年に渡る不在という好転させるべき否定的状況

の中に、思婦の堅固な道徳性という部分的な肯定的側面を見出そうとする王僧孺の姿勢を基盤とする表現となっている。それと同時に、この句で一篇が閉じられていることは、作中人物が置かれている境遇を改善するための具体的な手立てには言及しない、一種の楽天的な態度の表れであるとも見なせる。無論、王僧孺の意図は残された妻の感傷と、さらにはそこに溺れない堅固な意志を描く点にあるゆえ、現実的な境遇改善の方途を詠じていないのは当然といえば当然である。つまり王僧孺「春怨」は作品内部の仮構空間とは距離を置いて、その空間に対する積極的な関与は自制するという創作の前提に立っているものであり、正面から取り組む必要のある政治上の切実な問題を、そもそも自分事として引き受けようとしてはいないのである。

しかるに李賀の場合はどうかといえば、「猶能」を用いた第五句で、まずは自己の身体を蝕んでいる病の存在を確認した上で、次句において人生には何事も起こりうるという一般的真理を持ち出すことによって、病に対する観念的な解決の糸口を、一義的には弟に、そして二義的には自分自身に向けて口ずさむ。つまり、王僧孺が否定的な状況の中から強いて肯定的価値を摘出するために「猶能」を用いていたのに対して、李賀は病が癒えないという否定的状況を認めてあるがままに受け止めつつ、しかしそれは人間の生全体を視野に入れば取り立てて悲観すべきものではないというように、俯瞰を契機とする価値の転換を表現するための足がかりとして、「猶能」を用いているのである。換言すれば、個別の苦境を人的営為全体の中に相対的に位置づけようとする試みが、李賀の詩に潜在しているといえるのではないだろうか。

次に、同じく「猶能」が詠じられている例として、李賀と同時代の賈島の作品である「病蟬」（齊文榜『賈島集校注』人民文学出版社、二〇〇一、三〇一頁、全八句）を取り上げて比較検討してみたい。これは詩題から察せられるように、病とも関連する。前段の四句に、

病蟬飛不得 病蟬飛ばんとして得ず
向我掌中行 我の掌中に向いて行く
折翼猶能薄 折翼 猶能く薄まり
酸吟尚極清 酸吟 尚極めて清し

と見えている。病によって飛べなくなった蟬は、賈島の手のひらの中でわずかに身を進めるのが精いっぱいのである。「猶能」を用いて折れた羽を引きずりながら佇む蟬の姿を描写する第三句は、克服すべき苦境（＝病）の中に残されたわずかな活力の確認に過ぎない。「黄雀並鷺鳥、俱懷害爾情（黄雀並びに鷺鳥は、俱に爾を害する情を懷く）」というように、凶悪な外敵の存在を示唆する二句によって一篇が閉じられている点に鑑みれば、蟬の命がもういくばくも残されていないことがおのずと連想される。局限されつつある命の中でお清冽な響きをたてる蟬に、賈島が自分の境遇を重ねて同情を寄せているのだとすれば、持ち前の本領を十全に発揮できない現況の不由さは、賈島自身のものであるといえる。限りなく自己の能力が抑制されつつある現況を、一篇全体を通して蟬に仮託しながら比喩的に造形しようとする賈島にとって、価値の転換による自己救済など思いもよらなかったはずである。病と関連づけて「猶能」という語を用いている点で李賀の「示弟」と賈島の「病蟬」は共通するが、その内実は決して小さくはない相違を呈していると見なしている。

ここまで、「猶能」という語に着目しながら、李賀「示弟」の第五句について考察を加えてきた。この句を含む第五・六句に込められた李賀の意図は、克服すべき苦難である病が、弟とは三年ぶりの再会であるにも関わらず、いまだに癒えていないことを一度受け入れた上で、それを広く認められた人生訓に照らして再解釈し、自身の憂慮を隠蔽する点にある。人生には起こりえないことなどない、という当たり前といえれば当たり前の哲理を引き合いに

出しながら、自身の病を矮小化して作品に形象しているのである。一見樂天的にも映る態度を装うその口吻は、どこか投げやりな印象すら与えるが、久しぶりに再会した弟の不安を除こうとする、兄としての李賀の精いっぱい気遣いと韜晦が背景にあればこそ、こうした詩句が詠じられたのであろう。

韜晦の態度は末尾の二句にも引き継がれている。すなわち、病を含む万事が人知によってコントロールしきれるものではない限り、運を天に任せて時々刻々と変化する事態に対応するのみ、と詠じているのがそうである。実人生の行く末をさいころ博打に見立てる大胆な比喻は、何事にも動じない海千山千の猛者の心性を思わせる。しかし、こうした悟りきったような開き直りが、自身の病と対峙する際の李賀の心理の基調であったわけではない。それは前節で取り上げた作品を見れば一目瞭然である。詩の読者として想定する相手の違いによって、病の表象はまったく異なる相貌を見せうるのである。

ところで、韜晦の態度を示すために用いられていた「臯盧」の語は、李賀も含めて『全唐詩』に五例を数えるのみの目新しい詩語である。賭博を意味するやや通俗的な素材であるだけに、詩に取り込まれるのが遅れたのである。李賀は「臯盧」の語に備わっている通俗性を利用して詩に軽みを添え、病に付属しがちな深刻さを回避しているように読める。それでは、唐代の他の例と比較して、李賀の表現上の特質は看取されるのであろうか。以下、李賀以外の唐詩の用例についていささか検討を加えてみたい。

唐詩において初めに「臯盧」の語が見られるのは、杜甫の「今夕行」（『杜詩詳註』巻一、全一〇句）である。

1 今夕何夕歳云徂 今夕 何の夕ぞ歳云に徂く

2 更長燭明不可孤 更長く燭明らかにして孤なる可からず

3 咸陽客舎一事無 咸陽の客舎 一事無し

4 相与博塞為歆娛 相い与に博塞して歆娛を為す

5 馮陵大叫呼五白 馮陵 大叫して五白を呼ぶ

6 祖跣不肯成梟盧 祖跣 肯て梟盧を成さず

7 英雄有時亦如此 英雄 時有つてか亦た此くの如し

8 邂逅豈即非良図 邂逅 豈即ち良図に非ずや

大晦日という年に一度のめでたい夜であるにも関わらず、杜甫は暇を持て余していたため、人々と集まってさいころ博打に興じたと詠じている。第五・六句は、大声で出目を叫び、肌脱ぎになって真剣に遊ぶ、いかにも粗野で荒々しい男たちが目に浮かぶような迫真的な描写となっている。そのような勇猛な男たち、つまり「英雄」との「邂逅」を杜甫は楽しんでいる。ここに詠じられている「梟盧」は、大晦日にふさわしい賑やかさを演出しているといえる。従って李賀詩のように、人生行路の不可知性を象徴する要素は認められない。

元稹（七七九〜八三一）の詩には「梟盧」が二例用いられている。ここでは「戲贈樂天復言」（周相録『元稹集校注』上海古籍出版社、二〇一一、六五四頁、全八句）を見ていきたい。

1 樂事難逢歲易徂 樂事は逢い難く歳は徂き易し

2 白頭光景莫令孤 白頭の光景 孤ならしむる莫かれ

……

5 眼力少將尋案牘 眼力 少しく將に案牘を尋ねんとし

6 心情且強擲梟盧 心情 且く強いて梟盧を擲つ

初句で時の移ろいやすさに言及し、次句ではその肉体的顕現である白髪を詠じている。冒頭の二句は先に見た杜

詩の書き出しと構造が似通っており、直接的な影響関係を想定して大過はないであろう。第五・六句は、身心両面の老いを前提として、文書と向き合う日常の業務や、日々の気構えについて詠じている。すなわち、視力の低下によつて一字一字を追うようにして仕事をこなしているが、そうかといつて精神的に塞ぎ込んでいるわけではないと、元稹は述べているのである。いたずらに老いを慨嘆するのではなく、運を天に任せるといふ開き直った心情が、「梟盧」の比喻によつて表現されていると見なしていいだろう。ともすれば憂いに沈みがちな精神を、「強いて」博打に挑むときのような心持ちに切り替えるというのは、よりよく老いを生きるための知恵でもある。知音である白居易に送った「戲詩」であればこそ、元稹は博打という卑俗なモチーフを取り込みえたのであろう。第六句に「心情」の語が用いられている点からして、実際の行為としての博打が想定されているのではなく、比喻的な意味で「梟盧」が用いられていると判断できる。

続いて、韓愈の「送靈師」（錢仲聯『韓昌黎詩繫年集釈』上海古籍出版社、一九八四、二〇二頁、全九〇句）にも、「梟盧」の語が見えている。

- | | |
|----------|---------------|
| 17 囲棋闘白黒 | 棋を囲んで白黒を闘わし |
| 18 生死隨機權 | 生死 機權に随う |
| 19 六博在一擲 | 六博 一擲に在り |
| 20 梟盧叱迴旋 | 梟盧 迴旋を叱す |
| 21 戰詩誰与敵 | 詩を戦わして誰か与に敵せん |
| 22 浩汗横戈鋌 | 浩汗 戈鋌を横たう |
| 23 飲酒尽百觥 | 酒を飲んで百觥を尽くし |

24 嘲諧思逾鮮 嘲諧 思い逾いよ鮮なり

詩を送った相手である靈師の、仏僧らしからぬ嗜好や優れた才覚を列挙している。靈師は、囲碁や博打を好み、詩を作っては誰も敵わないほどであり、さらには尋常でない量の酒を嗜む。ここで詠じられている博打は、おおよそ僧侶であれば行わないような俗事の象徴となつていると考えられる。

ここまで、唐詩における「梟盧」の用例を概観してきた。杜甫を筆頭とするいずれの例も、「梟盧」の語を用いることによつて作品に通俗的な要素を加味している。杜甫及び韓愈の例は、実際の賭博の場を想定した表現となつており、その点で李賀とは発想が異なる。李賀と同じように、自分自身の楽天的な気構えを表現するためにこの語を用いているのは元稹である。元稹の「戲贈樂天復言」は、李賀詩のように親類に宛てたものではないが、それに匹敵するような親密な交誼を結んでいた白居易に向けて「戲」れに送った作品であるだけに、「梟盧」を詠じることによつて鮮明になるややくだけた口吻が、気兼ねのない二人の関係性を一層強調しているように思われる。ただし、元稹は老いを、李賀は病を念頭に置いて「梟盧」を用いており、そこに両者の差異が認められる。

結局のところ、「示弟」において李賀は、現在の病状が具体的にどのような状態にあるのかをいいたいのではなく、人間生活の中では病も含めて何が起こるかかわからない、だから自己の意思をかたくに通そうとするよりも、運を天に任せるのが賢明だという考え方を叙述しようとしているのである。そのような方向に作品が傾斜していく背景に、詩を与えた相手が身近な存在である弟だったという外在的な要因が想定されるのである。

(二)「昌谷読書示巴童」について

次に、「昌谷読書示巴童」(『箋注』六八頁、全四句)を見ていきたい。これは李賀に仕えていた巴蜀地方出身の童牧(＝「巴童」)に示した作品である。

虫響灯火薄　虫響いて灯火薄く

宵寒薬氣濃　宵寒くして薬氣濃こまやかなり

君憐垂翅客　君は憐れむ　垂翅こまの客を

辛苦尚相従　辛苦して尚相い従う

この詩について曾益は以下のように述べている。

虫響灯薄、宵寒薬濃、其愁病可知。愁病従失意来故曰垂翅。此時而相従、出人情外矣。矧辛苦乎。曰君憐、志感也(虫響き灯薄く、宵寒く薬濃やかなるは、其の病を愁うること知る可し。病を愁えて失意して従り来このかたにして故に垂翅と曰う。此の時にして相い従うは、人情の外に出づ。矧いづんや辛苦するをや。君は憐れむと曰うは、志の感ずるなり)。

薄暗くて寒い部屋の中に、虫の音が響き、薬の臭いが立ち込めている。そうした周囲の情景から病への憂愁を読み取る曾益の解釈は自然である。ただし、一篇は沈鬱な心情の吐露には傾斜しない。いつ離れていてもおかしくないような辛苦を、なおもともにしてくれる巴童への思い入れが、後半の二句に顕現しているからである。

「昌谷読書示巴童」には姉妹篇ともいうべき作品が存在する。「巴童答」(『箋注』六九頁、全四句)である。これは、「昌谷読書示巴童」に表現されていた李賀のねざらいに対する巴童の返答を、李賀自身が同じ形式の詩に仕

立てたものである。

巨鼻宜山褐 巨鼻 山褐に宜しく

龐眉入苦吟 龐眉 苦吟に入る

非君唱樂府 君樂府を唱うるに非ずんば

誰識怨秋深 誰か怨秋の深きを識らん

「あなたさまが樂府を詠じてくれるのでなければ、誰も怨めしい秋の深まりなど知ることはできないでしょう」(第三・四句)というように、日頃はあえて伝える機会のなかったであろう内心を、巴童は吐露している³¹⁰。病を患いながら継続していた李賀の創作営為に意味や価値を与えたのは、知識人であるところの知人たちではなく、社会的には無力である巴童であつたといえる³¹¹。

改めて「昌谷読書示巴童」を見てみると、第二句には立ち込める「薬氣」が詠じられており、その背後に病を患う作者の存在が暗示されているのだが、病そのものへの憂苦が詩の前面に立ち現れているわけではない。この点については、李賀と時代を同じくする王建(七六六〜八三二?)の七律「晚秋病中」(王宗堂『王建詩集校注』中州古籍出版社、二〇〇六、四〇〇頁)に、李賀の詩と同様「薬氣」の語を用いながら、

3 偶逢新語書紅葉 偶たま新語に逢えば紅葉に書するも

4 難得閑人話白雲 閑人を得難くして白雲に話す

……

……

7 病多体痛無心力 病んで体の痛きこと多く心力無し

8 更被頭辺薬氣薰 更に頭辺に薬氣の薰るを被る

と詠じられているのと比較するとその特徴が明確になる。病に侵されていても王建の創作意欲は活発であり、思いついた言葉を紅葉に書きつけるほどである。しかし、暇を見つけて付き合ってくれる人はなく、せいぜい白雲に向かつて話しかけるのが関の山である。気軽に話し合える相手がいなかったため、王建は病中の鬱憤を紛らせないでいる。その結果として、多病による肉体の苦痛やそれに伴う精神的な衰弱を作品末尾に至って意識せざるをえない。葉気の熏ぶる部屋の中、気の合う相手とてない寂寞感が病人を苛んでいるのである。

翻って李賀の詩を見てみると、小さな灯火がぼつんと灯る寒い夜^じという、寂寥とした周囲の状況があらかじめ提示されており、それは王建詩に似て病者の悲観を示唆するかに見える。しかしそうした情景は、その後に展開される李賀と巴童の人間味溢れるやりとりを裏側から効果的に演出するのであって、貧賤や病に対する歎きの表徴とはなっていない。李賀詩と王建詩との相違点は、第三者の存在、なかならず心の通ずる理解者の有無であるといっている。

葉気をたきしめるのは、一晚に限ったことではなく、日常的に行われていたのである。文献的な裏づけはえがたいが、巴童が日頃からその準備などに従事していた可能性もある。そうした日常的な営みによって李賀と巴童との間に血の通った人間らしい交流が生まれたのだとすれば、そのきつかけの一つは病であったということになる。そうしたいわば病の生産的な側面に表現の重点が置かれているからこそ、病そのものに対する負の感情が「昌谷読書示巴童」においては抑制されているのだと解釈できるであろう。先に引いた李賀の「仁和里、雑叙皇甫湜、湜新尉陸渾」（『箋注』九一頁）には、「欲雕小説干天官、宗孫不調為誰憐（小説を彫して天官を干めんと欲するも、宗孫調せられずして誰の憐れむところと為らん）」と見えており、ここには官僚社会での活躍に対する意欲と、それとは相反する不遇な状況にある自分に同情して手を差し伸べる者としてない孤独感とが綴られている。こうした表現

との比較を通してここで述べておかなければならないのは、李賀が生活のあらゆる場面において孤独であったわけではないということである。以上に見てきた巴童との関係性がそれを裏書きする。そして、社会的栄達に付き物の打算を排除した、真に血の通った人間関係が成立した背景に、病が実のところ積極的な形で作用していたことも合わせて特筆されてよいであろう。

おわりに

本論の冒頭でも言及したように、病を中心的なテーマに据えた李賀論は、すでに汗牛充棟の観を呈しているといつても過言ではない。多くの論者の目を引くに足るだけの問題提起力をはらんだテーマであるのは間違いない。しかし、これもすでに述べたことではあるが、それらの論稿の大部分を占めるのは、李賀独特の幻想的な文体が形成された要因として病を想定するものである。病を詠じた作品そのものの分析が極めて少ないのはそのためであろう。以上のような先行研究の傾向を踏まえた上で、本論では、生身の人間である李賀の体質的特徴を作品の個性と短絡するのではなく、表現の分析に考察の重点を置いた。換言すれば、李賀の病気体質を作品の個性の裏づけとするのではなく、病の描写の中に個性や工夫を見出すことを目的としてきたわけである。伝記的事実としての李賀の病を追求するために、詩をその根拠となる史料として読むのではなく、詩中の病の描写が一篇の中でどのような機能や役割を担っているのか、あるいはそうした表現を支えている詩人の発想がどのようなものであるか、といった諸点の究明こそ、作品理解に欠かせない要素であると考えたためである。

上記の目的を達するための手がかりとして、本論では、想定される読者の相違によって病を詠じた李賀の詩を分

類し、個別に検討を加えてきた。

知友に送った作品における病の表象がいかなるものであったかを探るに際しては、「出城、寄権璣・楊敬之」と「仁和里雜叙皇甫湜、湜新尉陸渾」を例に取った。これらの詩には、ありうべき理想的な自己と、そうした姿からはかけ離れた現実との間で引き裂かれざるをえなかった李賀の焦燥や憤懣が表出されており、従って病は、そうした否定的な感情を助長するようなものとして詠じられていた。それと同時にこれらの詩における病には、それを相手に知らせることで自分への配慮を引き出そうとする意図が、多かれ少なかれ込められているのであろう。物質的な支援や精神的な顧慮を相手に求めるような直接的な表現こそないものの、何らかのフィードバックに対する期待が背後に見え隠れしているように思われる。「誰の憐れむところと為らん」（「仁和里雜叙皇甫湜、湜新尉陸渾」の第一八句）という表現に端的な形でうかがえるような孤独感や悲哀が、この節で取り上げた作品の基調となっているのである。

弟や使用人に送った、「示弟」や「昌谷讀書示巴童」にも病が詠じられていた。「示弟」における病は、「人生には起こりえないことなどない」という動かしがたい哲理によって韜晦されていた。三年ぶりに再会した弟に対する李賀の配慮が、そうした表現を成立させたのである。必ずしも唐代においては普遍的な詩語とはなっていないかった「臯盧」という道具立てを取り込むことで、一篇に通俗的なおらかさを加味しているのも、弟に心配をかけまいとする、兄たる李賀の気丈なふるまいに他ならない。「昌谷讀書示巴童」には「藥氣」の語が見えており、それによつて病が暗示されている。しかしそれは憂愁の対象とはなっておらず、むしろ召使である巴童との間の、血の通った人間関係の形成を可能にした媒介としての意味合いが濃厚であるように見える。巴童は李賀の創作営為に価値を見出した人物でもあった。自己に肯定的な存在意義を見出すとき、病に対する憂愁は後景化するといえるのである。

う。

全体に共通していえるのは、病は社会的要素であり、想定される読者や詩の主題によって、その表象の在り様は変化するということである。強調しておくべきは、こうした自他を取り持つ可変的媒介としての病は、常に生の現場を基盤として作品化されているという点である。病によつてもたらされた死の観念が、李賀の特異な作風の形成に寄与したとする解釈は複数の先行研究に示されているが²⁰、本論で検討を加えてきた作品群による限り、病と死は、少なくとも表面的には結びついているとはいえないであろう。死ではなく、病がむしろ生と向き合う契機となつてゐることは動かしがたいように思われる。生の枠組みの範疇でいかにふるまうかが、病を詠じた詩における、李賀の欠かせない視点であつたと見なして大過はないはずである。

*『李商隱文編年校注』に従つて該当する部分のみ引いておくと次のようになる。

長吉將死時、忽昼見一緋衣人、駕赤虬、持一版、書若太古篆或霹靂石文者。云當召長吉。長吉了不能讀。歛下榻叩頭言、「阿嬭老且病、賀不願去」。緋衣人笑曰、「帝成白玉樓、立召君為記。天上差樂不苦也」。長吉独泣。辺人尽見之。少之長吉氣絶。

*張宗福『李賀研究』（巴蜀書社、二〇〇九）の第十章「李賀詩歌的病態美」に、「李賀病得非常嚴重、二十七歲就英年早逝的事實可以完全証明這一點」（二〇四頁）と述べられている。

*例えば曹琰「論李賀的病變与文變」（『科技信息』二〇〇九、第二九期）には、次のような記述がある。

一般來說、疾病帶給人們的是痛苦、但于詩人的創作而言、未必不是好事、由于身体上的病痛、李賀不能像正常人那樣為生活而四処奔走、他只能一個人悶在家里頭想着自己的心事、写着詩歌、斟酌字句、為此其詩歌現實性雖不強、但却充滿了幻想、用字也凝練、別致、独具一種風格。（五九八頁）

曹琰氏は、病によって強いられた非行動的な生活が、李賀の作品に幻想性を与えたと考えているのである。確かにそうした側面が多かれ少なかれあったであろうことを本論も否定はしない。病による苦痛を糧として、空想の世界を構築しようとする精神的な営為は、創作の一方途として普遍的に認められると考えるからである。しかし見落としてはならないのは、李賀が病と現にどう対峙したか、そしてそれがどのように作品に表象されているか、といった諸点である。作者の身体的特性と作風とを安易に直結させてよしとするのではなく、今一度表現に立ち返って分析を加える必要があるだろう。

※鎌田出「司馬相如の病——唐代詠病詩と消渴——」（『中国詩文論叢』第一〇集、一九九一）は、詠病詩を大別して次のように定義している。

本稿では、疾病及び疾病にまつわる話題が作詩の動機的一端として示されている詩——すなわち、詩題に「疾病及び疾病にまつわる話題」に関する言及が表れている詩——を狭義の「詠病詩」と定義し、……広義の「詠病」詩（詩題に限らず広く疾病について詠み込む詩）と区別する。（一五四頁）

※埋田重夫「白居易詠病詩の考察」（『中国詩文論叢』第六集、一九八七。後に『白居易研究——閑適の詩想』汲古書院、二〇〇六、に収録）は、『唐詩類苑』や『唐詩類苑選』の人物・疾病における採録状況から、狭義の詠病詩は中唐から晩唐にかけて活躍した詩人たちによってピークが築かれたと判断しているが、両書に李賀の詩は採録されていない。

※一例として、姚合に「病中書事寄友人」（吳河清『姚合詩集校注』上海古籍出版社、二〇一一、一三四頁）、李端に「病後遊青龍寺」（『全唐詩』卷二八四）という作品がある。

※動物と病を関連づけて詠じた詩句を抜き出すと次のようになる。「犬書曾去洛、鶴病悔遊秦」（「始為奉礼、憶昌谷山居」、吳企明『李長吉歌詩編年箋注』中華書局、二〇一一、一三八頁。以下、『箋注』と略称する）、「虫棲雁病蘆筍紅、迴風送客吹陰火」（「長平箭頭歌」、『箋注』五五五頁）。

※一例として、王建に「酬張十八病中寄詩」（王宗堂『王建詩集校注』中州古籍出版社、二〇〇六、一九八頁）という作品がある。

※原文は次のとおり。「晋惠帝元康五年、武庫火燒漢高祖斬白蛇劍・孔子履・王莽頭等三物、中書監張茂先懼難作、列兵陳衛、咸見此

劍穿屋飛去、莫知所向」。

*10 陳允吉・呉海勇『李賀詩選評』（上海古籍出版社、二〇一一）は、「当初他満懐自信躋入官場、現在却身荷疾病凄然離去、其命運之變演究竟是出于何故。這樣的困惑誠然不是李賀自己所能開解的」（八九頁）と述べて、自分自身では解決しかねる現状に対する李賀の困惑を読み取っている。

*11 李賀の詩における劍については、清原文代「李賀の劍」（『女子大文学 国文篇』第五〇号、一九九九）を参照。森瀬壽三「李賀詩の道教的側面」（『唐詩新攷』関西大学出版部、一九九八、所収。初出は『日本中国学会報』第二八集、一九七六）にも関連する記述がある。また、松本肇「李賀の詩をめぐる宇宙論的考察」（『唐代文学の視点』研文出版、二〇〇六、所収。初出は内山知也編『中国文学のコスモロジー』東方書店、一九九〇）の「五 馬と劍のシンボリズム（二）——劍のシンボリズム」にも考察がある。

「出城、寄權璩・楊敬之」について松本氏は、「出城別張又新酬李漢」（『箋注』四五四頁）の「時宜裂大袂、劍客車盤茵。小人如死灰、心切生秋榛」という詩句を引いた上で、「李賀にとって劍とは、『病身』『小人』などのマイナスの存在の対極にきらめくあこがれの星にほかならなかった」（二三四頁）と述べている。

*12 他にも張籍の詩と同じように、「養」と「病」や「疾」とを一句中、あるいは対句に構成する唐詩の例は少なくない。例えば韋応物「西郊養疾聞暢校書有新什見贈久佇不至先寄此詩」（孫望『韋応物詩集繫年校箋』中華書局、二〇〇二、一七九頁）の冒頭に、「養病愜清夏、郊園敷卉木」と見えており、張籍と同じように季節（清夏）と関連づけて「養病」の語が用いられている。唐代の詩人たちは病の静養に関心を払い、その時々々の季節と絡めながらそれを作品化していたのである。しかし李賀詩に同様の表現は見当たらない。恢復を企図すべきものとして、李賀は病を表現してはいないのである。健康という肯定的価値を喪失した形で、李賀は病と対峙していたという本論「はじめに」の指摘は、こうした点からも補足される。

*13 加藤敏「李賀の詩と漢文教材」（『千葉大学教育学部研究紀要』第五二号、Ⅱ…人文・社会科学編、二〇〇四）に、「志を得ず帰郷してゆく者にとって、この『宮花』は、結局手が届かなかった繁栄に満ちた晴れがましい役人としての日々のイメージなのであり、それ故に耐え難いほどに心を苛むはずである。／苛まれた心は、せめて自嘲によつてその苦痛を和らげるしかないであろう。この

ように読むことによって、始めて承句から転句への転換が理解される」（四二〇頁）とあるのが参考になる。

*14「出城、寄権璩・楊敬之」の「草暖雲昏万里春」と、先に取り上げた張籍「病中酬元宗簡」の「東風漸暖滿城春」という二首の書き出しの句が、表面的には交換可能なほどに似通っていることがその傍証となろう。

*15参考までに記しておけば、当然ながら病は四季を問わずに人体を蝕み、唐代の詩人たちはそれぞれの季節に応じた病の様態を詠じている。ここで一季につき一首ずつ例を挙げると、春の例として白居易の「強起迎春、戲寄思黯」（謝思煒『白居易詩集校注』中華書局、二〇〇六、二六五〇頁）に「杖策人扶廢病身、晴和強起一迎春」とあり、夏の例として杜甫の「多病執熱奉懷李尚書」（『杜詩詳註』卷二一）に「衰年正苦病侵凌、首夏何須氣鬱蒸」とあり、秋の例として劉禹錫の「思歸寄山中友人」（瞿蛻園『劉禹錫集箋註』上海古籍出版社、一九八九、一四七四頁）に「蕭條對秋色、相憶在雲泉。木落病身死、潮平歸思懸」とあり、冬の例として白居易の「冬至宿楊梅館」（『白居易詩集校注』一〇五七頁）に「若為獨宿楊梅館、冷枕單床一病身」とある。

*16陳允吉・吳海勇『李賀詩選評』（上海古籍出版社、二〇一一）は、「如『南園』第九首『泉沙奕臥鴛鴦暖』句的詩境、明明白白脫胎于老杜『絕句二首』『沙暖睡鴛鴦』句」（九頁）と述べて、杜甫の影響を認めている。

*17病身を無理に起こして行動するというモチーフは、病を詠じた唐代の詩に広く認められ、時代が下るにつれて数量的に増加しているように見受けられる。一例を挙げておくならば、孟郊「病起言懷」（華忱之・喻学才『孟郊詩集校注』人民文学出版社、一九九五、一四〇頁）の冒頭に、「強行尋溪水、洗却殘病姿」と詠じられている。後述する劉言史の「扶病春亭」も同様である。

*18「菱糸」の語は、李賀の「釣魚詩」（『箋注』七一頁）にも、「菱糸縈独繭、蒲米蟄双魚」とあるが、『全唐詩』においては他に陸龜蒙が一例用いているにとどまる。詩的に定型化されていない目の前の植物を詠じているところに、病を押しても立ち上がる李賀の心の浮き立ちが滲み出ているように思われる。

*19李賀の「春婦昌谷」（『箋注』四六二頁）にも「思焦面如病、嘗膽腸似絞」という顔面と病を関連づけて詠じた例が見られる。なお、唐代以前の詩において「面」と「病」を一句に構成した例はなく、『全唐詩』についても李賀以外に王建の一例を見るのみである。

「宮中調笑四首」（其一）（『王建詩集校注』一一四頁）に、「团扇、团扇、美人病来遮面」とあり、病に罹った宮中の女性が团扇に

よって顔を覆い隠すと詠じられている。後世の詩を含めても、「面無膏」という表現は、明・方孝孺の「訊瘡」（『遜志齋集』）巻二（三）に、「方子暫遭疾、身疲面無膏」とあるのが目につく程度である。

*20 李賀は他にも「膏」字を三例用いており、それぞれ「土膏」「膏蘭」「蘭膏」と熟す。「土膏」は養分を含んだ土、「膏蘭」「蘭膏」はともに灯火の油を指す語であるため、李賀詩中においても「仁和里雜叙皇甫湜、湜新尉陸渾」の用例は特殊な位置を占めている。

*21 「疫病」は平易な語であるように見えるが、『全唐詩』においては李賀の一例を見るのみであり、李賀の前後の時代を含めても、散文の用例が大方を占めている。

*22 李賀がこのように詠じているからには、昌谷とは反対に得体の知れないような神に平癒を願うような風俗が局地的には存在したはずであるが、そうしたモチーフが詩に取り込まれた形跡は見出しがたい。ただし病とは無関係に邪神信仰の風俗が詠じられることはあったようで、その際に用いられる語彙の一例として「淫祀」が挙げられる。具体例をいくつか示すならば、杜甫「南池」（『杜詩詳註』巻一三）に、「歌舞散靈衣、荒哉旧風俗。……淫祀自古昔、非唯一川瀆」、劉禹錫「南中書來」（『劉禹錫集箋註』一四七三頁）に、「君書問風俗、此地接炎州。淫祀多青鬼、居人少白頭」とそれぞれ詠じられている。「淫祀」は『礼記』曲礼下篇を出典とする語彙である。

*23 当然ながら、具体的病状の細部を描写しようとする態度そのものは、李賀にのみ認められるわけではない。一例として、杜甫「病後過王倚飲贈歌」（『杜詩詳註』巻三）に「瘡癘三秋孰可忍、寒熱百日相交戰。頭白眼暗坐有眊、肉黃皮皴命如線」と詠じられているのは、痛々しいまでに真に迫った表現となっている。これは特定の相手を対象とする詩である点においても李賀の詩と共通している。ただし杜甫の作品は、詩題に「病後」とあるように、治癒した後の回想を詠じたものである。

*24 「聴穎師彈琴歌」に用いられていた「病客」の語を李賀はもう一例用いている。「潞州張大宅病酒、遇江使寄上十四兄」（『箋注』五七七頁）の第五句から第八句にかけて、「病客眠清曉、疎桐墜綠鮮。城鴉啼粉堞、軍吹壓蘆煙」と詠じられており、この一節について曾益は、「病客謂己。桐墜亦秋。鴉啼・軍吹足清曉。言清曉病眠所聞唯是」と述べている。病は活動を抑制するが、それとは反対に聴覚を鋭敏にする。だからこそ、「聴穎師彈琴歌」において李賀は琴の音と病状とを結びつけて詠じているのであろう。聴覚に

まつわる事項と病が関連づけられているという意味では、「傷心行」(『箋注』七三〇頁)の「咽咽学楚吟、病骨傷幽素」という二句も類型表現と見なせるであろう。

*25 李賀「示弟」の第七句が下敷きになっているとされる『莊子』応帝王篇の、「秦氏其臥徐徐、其覺于于。一以己為馬、一以己為牛。其知情信、其德甚真。而未始入於非人」という一節を踏まえたいい方となっている。馬であろうが牛であろうが、他人が自分をそのように見なすのならば、その見立てに従う、との意である。

*26 李賀の詩の「猶」を「独」に作るテキストもあるが、今は底本に従って行論する。

*27 主要な詩人の用例のみ列挙しておくならば次のようになる。引用はいずれも末尾の一聯である。孟浩然「裴司士・員司戸見尋」(修培基『孟浩然詩集箋注』上海古籍出版社、二〇〇〇、三二七頁)の「誰道山公醉、猶能騎馬迴」、杜甫「臨邑舍弟書至苦雨黃河泛溢隄防之患簿領所憂因寄此詩用寬其意」(『杜詩詳註』卷一)の「却倚天涯釣、猶能掣巨鼇」、顧況「送韋秀才赴舉」(『全唐詩』卷二六六)の「唯有殘生夢、猶能到日辺」、李端「贈故將軍」(『全唐詩』卷二八五)の「誰道廉頗老、猶能報遠讐」、白居易「和令狐相公寄劉郎中兼見示長句」(『白居易詩集校注』二一五〇頁)の「酒軍詩敵如相遇、臨老猶能一拋鞍」。

*28 ちなみに徐夤「病中春日即事、寄主人尚書二首」(其一)(『全唐詩』卷七〇九)には、「層氷照日猶能暖、病骨逢春却未蘇」とあり、「猶能」と病が近接して詠じられているが、「猶能」が形容しているのは、本来であれば病の治癒を促進すべき春の「暖」かさである、李賀とは発想が異なる。

*29 松本肇「賈島の文学」(『唐代文学の視点』研文出版、二〇〇六、所収。初出は『文芸言語研究・文芸篇』第四九号、二〇〇六)に、「病気の蟬は、賈島の自画像であろう。飛ぼうとしても飛べず、多くの敵に囲まれている」(二七八頁)という記述がある。

*30 ただし、他の唐詩の用例も考慮に入れるならば、李賀と賈島は表現の大まかな方向性を同じくするものとして一括りにしておくべきではある。二人とは明らかに毛色の異なる例も多々見受けられるからである。その一例として、元結「宿洄溪翁宅」(聶文郁『元結詩解』陝西人民出版社、一九八四、二二九頁、全八句)の第三・四句に、「老翁八十猶能行、將領兒孫行拾橡」と詠じられているのが挙げられる。元結は、八十歳にしてなお健脚を保つ「老翁」を、驚きの眼で眺めているのである。老齡にはおよそ似つかわし

くないほどの肉体的若さを保っているという事実に対する意外性が、「猶能」に込められていると考えられる。

*32 巴童のような他者の評価もさることながら、李賀自身も楽府の制作に自信を持っていた。それは、「公莫舞歌」(『箋注』六九九頁)の序文に、「公莫舞歌者、詠項伯翼蔽劉沛公也。会中壯士、灼灼於人。故無復書、且南北樂府、率有歌引。賀陋諸家、今重作公莫舞歌云」と述べられているのによって理解される。『史記』のいわゆる鴻門の会的一幕を描く「公莫舞歌」の先行作を、李賀は「陋」として退け、改めて同題の一篇を詠じているのである。あえて先行例を否定するような序文は、それほど頻繁に書かれるものではないだろう。

*33 封建社会上の下層に属する人間を詩に詠じる例は、当然予想されるように、当時にあつてはそれほど多くない。使用人の人格や働きぶりを正當に評価し、個人名を書き入れたりしながらそれがある程度まとまった数の詩に残したのは、李賀と近い時期でいえば杜甫が筆頭である。これについては古川末喜「杜甫の農的生活を支えた使用人と夔州時代の生活詩」(『杜甫農業詩研究』知泉書館、二〇〇八、所収。初出は『中唐文学会報』第七号、二〇〇〇)を参照されたい。李賀が直接的に杜甫を意識していたとはいいい切れないかもしれないが、身分の差を度外視した人間的な慈愛に富んだ交流を詩に形象しようとする態度を共有しているのは間違いない。

*34 李賀詩における火勢の衰えた灯火については、拙稿「李賀『傷心行』の『落照』と『飛蛾』について」(『筑波中国文化論叢』第三二号、二〇一三)で言及したことがある。

*35 一例として、前掲張宗福『李賀研究』(巴蜀書社、二〇〇九)の第十章「李賀詩歌的病態美」に、「在李賀看来、死亡与病是緊密聯系在一起的、死亡因病而起、疾病又加速人的死亡、因此在他的詩歌里浸透了『病』的意義」(二〇六頁)という叙述がある。

(筑波大学大学院人文社会科学研究所科博士課程)